



Title	学校で、セーフな場で、共に考える : p4c ハワイの 実践から
Author(s)	中川, 雅道
Citation	メタフュシカ. 2013, 44, p. 55-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26533
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

学校で、セーフな場で、共に考える—— p4c ハワイの実践から

中川雅道

はじめに

幼稚園、小学校、中学校、高校に行って、哲学を教える。あなたなら、何をするだろうか。マシュー・リップマンが始めた子どもの哲学 Philosophy for Children (P4C) に込められているのは、そんな問いかけだ。本稿では、その問いについて私なりに答えてみたい。

リップマンはコロンビア大学に勤めていた頃、こんなことを考えた。「院生たちは世界を変えようという熱意をたくさん持っている。しかし健全に理由を与え、自分の人生に取り組む方法についてうまく判断力を働かせる能力に欠けている」¹。この問題意識から P4C は始まった。哲学を教えることで、理由を与える能力、人生に取り組む能力を教えることができる。大学から始めたのでは遅すぎる。それでは、小学校から始めてみてはどうだろうか。しかし同時に彼はこう考えた。「現代のアカデミックな世界の哲学はきっと子どもたちにそぐわない。でも、哲学をもっと取り組みやすいような方法で、例えば物語のような形で提示したら何が起きるだろうか」²。こうして『ハーリー・ストットルマイヤーの発見 *Harry Stottlemeier's Discovery*』³ といった P4C テキストが作成され、リップマンは物語を読んでその内容について探究するという形式の授業を行い、当初の目的に一定の成果を収めた。

本論はしかし、その後の展開に注目する。リップマンが始めた P4C は世界各国で形を変えながら実践されるようになった。その中でも、ハワイ州のワイキキ小学校、カイルア高校で行われている p4c⁴ ハワイに注目したい。p4c ハワイはハワイ大学のトーマス・ジャクソンが中心となっ

¹ Thomas E. Jackson, "Home Grown", in *Educational Perspectives*, Journal of the College of Education / University of Hawai'i at Mānoa, Vol.44, 2012, p.3. 引用文の日本語は拙訳。より詳しくは Matthew Lipman, *Thinking in Education Second Edition*, Cambridge University Press, 2003.

² Ibid., p.3.

³ Matthew Lipman, *Harry Stottlemeier's discovery*, Upper Montclair, N. J.: Institute for the Advancement of Philosophy for Children, Montclair State College, 1974.

⁴ ハワイ州で行われている子どもの哲学を p4c と記述する。その理由については後に詳述する。

て 20 年余りの実践の中で作り上げられてきた。ハワイではリップマンのテキストを使わずに、異なったやり方で p4c が実践されている。

初期の（P4C の）ワークショップで確かにいくらか成功を収めたのだが、すぐに私たちはリップマンの方法を修正する必要があることに気づいた。先生と生徒たちは共にテキストを読み、問いを考え出すことができる。しかし、ひとたび問いが選ばれたなら、探究を進め続けるためにすべきこと *what to do to keep an inquiry moving* によって、先生と生徒たちは邪魔されてしまうのだ⁵。

つまり、リップマンのテキストは問いを出すには有効なのだが、その問いを考える段になると、学校の先生と生徒たちにはできないことになってしまうのだ。本論ではまず、p4c ハワイがこの問題に対してどう対処したのかを論じる。そして、私がさらに考えたいのは学校での「哲学者の位置」である。学校で新しい授業をするとなれば、何が学校に欠けているのかを述べねばならず、そしてまた、あなた、哲学者と学校との関係が繰り返し問われることになる。その哲学者の位置に関して、ハワイの実践から学ぶことは多い。本論でハワイの実践に注目する理由はそこにある。

本稿ではまず、ジャクソンの論文「やさしい哲学探究」から p4c に込められた学校批判について考察する。p4c によっていったい学校教育の何が批判されているのか。しかし、批判するだけでは終わらない、その解決についてもまた論じることになる。その後 p4c の実践であるワイキキ小学校の 5 年生の授業を概観する。その授業の姿から p4c の目指すことが思考へのケアであることを明らかにする。そして、哲学のひとつの核心である論理についての教育もその思考へのケアの前提のもとで行われるのである。それらを描く過程で p4c の重要な側面、学校教育との関わり、子どもへの関わり、論理的能力との関わりを明らかにするのが本論の目的である。

まずは学校教育を問う

あなたは学校教育、幼稚園から小学校、中学校を経て、高校へと至るプロセスに疑問を感じたことがあるだろうか。もし感じていたとするなら、いったい何が欠けていたのだろうか。リップマンも、ジャクソンも同じ問題意識を抱えていた。学校には欠けているものがある。それは「考えること」である。なぜ、考えることが学校から閉め出されてしまうのだろうか。

学校には支配的な考えがある。それは「教師は『知っている』者であり、生徒は『学ぶ』者であるという考え」⁶である。教師は知識を持つ。授業ではその知識を教える。現在分詞の使い方から、ピタゴラスの定理、源平の合戦を通して、重力の意味と「けり」の活用まで、現代の学校は

⁵ Thomas E. Jackson, 2012, op. cit., p.4.

⁶ Thomas E. Jackson, "Gently Socratic Inquiry", 2001, p.4. この論文は p4c Hawaii のウェブサイト <http://www.p4chawaii.org> に掲載されている。発表年の記述がないため初出の Thomas E. Jackson, "The Art and Craft of 'Gently Socratic' Inquiry" In *Developing Minds: A Resource Book for Teaching Thinking*, 3rd ed. (ed. A. Costa) Alexandria, VA: Association for Supervision and Curriculum Development, 2001 の発表年に従う。訳文は拙訳、トーマス・ジャクソン「やさしい哲学探究」『臨床哲学』第 14-2 号所収、2013 による。

科目内容で溢れている。教師が授業で質問するのは、自分が教えた知識の理解だけになってしまう。その閉じた質問によって生徒の声が消えていくことになる。

幼稚園に入る頃に持っている不思議だと思う心 *sense of wonder* —— 本当の意味での考えることが、したがって自分自身で考えることが形成されるにあたり出発点となる不思議だと思う心——が小学校3年生になる頃には、多くの子どもから消え始め、6年生に上がる頃には、ほぼ完全に消え去ってしまいます⁷。

教師は理解を問う。理解を問う教室は「正しい／正しくない」の世界に変貌する。思考の基礎になる不思議だと思う心、つまり「驚くこと」は創造的な能力だと言える。誰も疑問に思わないことを疑問に思い、新しい問いを創造するプロセスは非常にデリケートなものだ。助動詞「けり」の理解を問う教師に対して、なぜ文法概念が存在するのかと創造力を駆使して問うことができるだろうか。私にはできない。できたとしても、場違いな質問として一蹴され、時には叱られることもあるだろう。「正しい／正しくない」の世界は驚くことを、思考を、問いを止め、生徒は教師の求める答えを述べるようになる。

p4c が提起する問い「学校で哲学を教えるとしたら」には学校に思考が欠けていることを批判する背景が含まれている。さらに「教える」といっても哲学史の知識を教えることではない。消されてしまう声、不思議だと思い、問いかける生徒の声を対話の中で聴くことが、思考すること、哲学することを教えることになる。それが p4c の出発点なのである。

対話における第一の関心事は、反論することでも、討論することでも、反対することでも、相手を導くことでも、前提を暴くことでもありません。心から、シンプルに、聴くことなのです⁸。

子どもの哲学の方法は聴くことである（それが方法だとして）。もしそうだとするならば、聴くことは英語、国語、数学といった科目とは少し違った位置を持つことになる。教えるべき内容というよりは、内容にアクセスするための方法であり、活動であり、そして生活全体に関わる態度であると言えるだろう。

それでも教室の中で

対話を行うといっても、対話にはさまざまな形式がある。p4c ハワイでは具体的には、輪になって座り、毛糸で作ったコミュニティボールを使って対話が行われている。そして、輪になって問いについて話し合っていくコミュニティのことを探究の共同体 *Community of Inquiry* と呼ぶ。

輪になって座ることには大きな意味がある。それは、教師も生徒と同じ身分で対話に参加し、

⁷ Ibid., p.3.

⁸ Ibid., p.4.

教える者と学ぶ者という不均衡を崩すことにある。教師は生徒と同じ探求者、あるいは、対話のインストラクションを行うという点でファシリテーターになる。

探求の時間には、できるかぎりいつでも、生徒と先生は輪になって座ります。……教師は、指導者や智者というよりも、対話を重ねながら子どもたちと共に探究する者になるのです⁹。

もうひとつの p4c ハワイの特徴はコミュニティボールと呼ばれる毛糸玉である。どのクラスでも学年の初めには全員でコミュニティボールを作ることから授業を始める。用意された質問（「あなたの名前は？」「好きなことは何？」「この学年に期待することは何？」といった）に答えながら、一人ずつ毛糸を筒に巻いていき、最後にバンドで毛糸の中心をまとめて、ボールの形に整える¹⁰。これを教室で行うことによって「探究の共同体へと変化していくものに具体的な形を与えること」¹¹ができるのだ。つまり、その場にコミュニティが存在することを具体的なボールによって確認できる。コミュニティボールにはルールがある。

(1) その瞬間にボールを持っているのが話す人。話し終わったら、その人が望むだれにでもボールを渡すことができる。(2) どんなときにでも、話さずにパスする権利がある¹²。

カラフルな毛糸で作ることから、話している人に注目を集めることができる。また、話す人も毛糸玉をいじりながら話すことができるので、少し落ち着いて話すことができる。大事なのは、ボールを渡されたら強制的に話さなければならないということではない点である。コミュニティボールには発言をパスする権利がある。コミュニティボールは対話へと招き入れるための道具なのであって、強制的に発言させるための道具ではない。

学校空間には思考が欠けている。それが、P4C が批判する点であった。輪になって座り教師が智者という立場から降りること、そして、コミュニティボールを使って思考へと招き入れることは、その批判から生まれた変革である。思考の欠けた学校の中で、それでも思考を生み出すためには何をせねばならないのか。輪になって座るという目に見える形で学校空間を変質させること、そして思考へと招き入れるインストラクションを行うこと。それによって、学校の中に思考を生み出す場を作り出すということである。

しかし教師の役割は

学校には思考が欠けている。だから、新しい教育の手法である p4c が学校を刷新しなければならない。こう述べるならば、途端にどこか危うさを感じるのは私だけではないだろう。ここで少

⁹ Ibid., p.4. 太字、傍線は原文通り。

¹⁰ 詳しくは Ibid., pp.6-7 を参照。

¹¹ Ibid., p.6.

¹² Ibid., p.7.

し立ち止まったほうがいい。まさに、この点に学校との関係が問われることになるからだ。これまでのところ、学校は批判の対象だった。学校には欠けているものがあるから、新しいプログラムが必要なのだ。さて、しかし、もしあなたが教員だったとしたら、この主張はどのように聞こえるだろうか。果たしてあなたは自分の立場がセーフだと思うだろうか。自分たちが行っている仕事は組織の外部の人間から非難されているだけだと感じはしないだろうか。探究の共同体に参加する人たちのセーフティ¹³を重視する p4c が学校で既に行われている実践を非難し、教員たちの立場をアンセーフなものにしていいとでも言うのだろうか。もちろん、答えはノーだ。

p4c ハワイを他の教育改革から区別するのは教員への配慮である。

私たちの一つめの革新。幾年月もかけて世界各地の他の P4C から p4c ハワイが区別されるようになった多くのことのうちの一つは教室の中で先生へのサポートが必要だと認識したことでした¹⁴。

先生へのサポートとは何だろうか。ここでジャクソンは重要な区別を行う。それは、探究の共同体に参加する先生とファシリテーターの違いである。もちろん、この二つの役割が同一の人物に同時に与えられることもあるだろう。しかしハワイではそうではなかった。ジャクソンは博士号を持つ、大学の先生なのである。いわゆる学校教育を担う、先生とは役割が違う。それゆえ、彼は自分のことを「テツガク」¹⁵のトレーニングを積んだ、ファシリテーターだと同定するのである。

私たちは理解したのです。先生が持つ教育者のスキルと p4c ファシリテーターが持つ哲学者のスキルが組み合わさることが、子どもたちを哲学の探究へと導き入れるのに必要不可欠であるということ¹⁶。

ジャクソンは大学で職を持ちながら p4c が行われるクラスに赴いて、先生と一緒に輪の中に入ることを選んだ。輪の中に入り、ファシリテーターの目からその実践を観察し、先生が困っていたら助ける。そういうサポートを行い始めた。時にはそこに指導している大学院生を連れて行き、ファシリテーターとしてサポートをさせる。それが、ここで名指されている、ファシリテーターと先生との関係である。

先生は自分の生徒たちのことを知っていて、いつ彼／彼女らが物事を理解するのに困難を経

¹³ 今回は詳論しないが、知的安全 *Intellectual Safety* が探究の共同体には必要なのである。「知的に安全な場所には嫌がらせはありません。蔑み、傷つけ、否定し、価値を下げ、嘲ることを意図して発言することも許されません。この場所では、輪になった他のメンバーに対する敬意が存在する限りにおいて、ほとんどどんな質問も、発言も受け入れられます」(Ibid., p.5).

¹⁴ Thomas E. Jackson, 2012, op. cit., p.4.

¹⁵ 次章で詳述するが、本稿では「大文字の哲学」と「小文字のテツガク」を区別し、前者を哲学、後者をテツガクと表記する。

¹⁶ Ibid., p.4.

験するのを知っています。そして、それに対する適切な対応がどういうものを知っているのです。……先生とファシリテーターのいずれもが、お互いに学び合うのです¹⁷。

先生は知っている。学校の授業は、その時間だけが単独で行われているわけではない。何時間も同じ場所にいて、何日間も生活を共にし、何年間もの成長を共に経ていくことになる。授業はその大きな流れの中の一コマにすぎない。先生は、休み時間の生徒を見て、誰と仲が良いのかを察知する。全校朝礼の様子や、体育祭での活躍、文化祭での共同作業での役割を見守る。そして、何度も何度もインストラクションを行い、失敗すれば失敗するほどに、よりよいインストラクションを探る。さらに、教室ではありとあらゆることが起こる。突然、生徒が教室から飛び出し、学校の外に逃げ出してしまうかもしれない。他の生徒からの無遠慮な言葉に傷ついて、泣き出してしまうかもしれない。輪になってイスに座っていたら、イスが後ろ向きに倒れて大怪我をするかもしれない。あるいは……、あるいは……。やはり、その辺りのことに配慮が向いているのは先生だろう。教室で起こったことを、その時間だけしかないファシリテーターには理解できないかもしれないのだ。

そのような教員の能力を認めることは簡単なことではない。反対に、ファシリテーターの「テツガク」の能力を教員が本当の意味で認めることも簡単ではない。しかし、教室にセーフな探究の共同体を作るには、この関係こそが必要なのだ。そのコミュニティに参加するすべての人に、そこにいてもいいという場所が与えられることは学校教育を変えるために学校と協働する必要不可欠な条件だと言える。そして、教員とファシリテーターの相互承認は相互の配慮なしには成り立たない。

大文字の哲学と小文字のテツガク

p4c は学校への、教員への批判から始まった。しかし、単に批判して終わらせるのではなく、学校と、教員と協働する道を選んだ。生徒たちをセーフティが守られるコミュニティで問いを探究することへ導き、先生たちをもその同じ共同体に導く。そのような探究へと向かわせることは、どんな考えに根ざしているのだろうか。その考え、「大文字の哲学」と「小文字のテツガク」という考えもまた、p4c ハワイの成果のひとつだ。

これに関連する、広く知られている考えがあります。哲学はそれ自身に内容と活動を持つ学問分野であるという考えです。このように理解されるなら、哲学は大人にだけふさわしい科目であり、大学の哲学科に所属する教授によって最もより良く実践される活動なのです。私はこのような考えを「大文字の哲学 Big-P philosophy」と呼びます¹⁸。

大文字の哲学は、哲学を「知識」の一分野にしてしまう。それは「知識」のあり方であるので、

¹⁷ Ibid., p.4.

¹⁸ Ibid., p.5.

それを知りたいと思う人にとってだけ必要なもの、プラトンやアリストテレスの哲学は子どもには難しすぎて「知識」として理解しがたいために、それを知りたいと望む大人にとってだけのものになる。それゆえ、その知識をよりよく蓄え、それを実践できるような大学の先生だけが占有する学問分野になってしまうことになる。これが、アカデミックな世界の大文字の哲学である。哲学がひとつの学問分野として機能していることには、それ自身の背景があり、必然性もあるのかもしれない。しかし、p4c はそのような方向には進まない。学校教育の実情にそぐわないという理由から、学問分野としての哲学をそのまま輸入することはしない。

小学校段階でのこの問題に立ち向かう中で、私は「小文字のテツガク little-p philosophy」と呼ばれるアプローチを作り上げました。小文字のテツガクの内容は、私たちすべてが世界を理解するために持ついくつもの信念であり、小文字でテツガクする活動は世界とのより大きい相互作用の一部として、このような信念を再考するプロセスなのです¹⁹。

p4c が選び取るのは小文字のテツガクである。小文字のテツガクは、その人が生活の中で世界を理解しようとすることをスタートにする。世界を理解しようとするとき、人は考える。そして、様々な信念を作り上げることになる。p4c が行うのは、探究の共同体という大きな相互作用に加わりながら、その信念をもう一度考え直すことである。

ここで、教室で行われる p4c の様子を覗いてみよう。p4c ハワイの最もポピュラーな授業は「プレーンヴァニラ」と呼ばれる（プレーンなヴァニラアイスのこと、一番シンプルな形式という意味）。輪になって座り、全員から問い（「大人になりたい?」「サンタは本当にいるの?」といった）を募集する。その中から、投票でどの問いが良いのかを選び、一番票が集まった問いについて話し始める。コミュニティボールを使って、それぞれの人がそれぞれの意見を話し始める。

ワイキキ小学校の5年生のクラスを訪れ、プレーンヴァニラに加わった。穏やかな目をした小柄な担任の先生が切り出した。「今日は見ての通りこのクラスを訪問してくれた人たちがいます。まずは自己紹介から始めましょう」。コミュニティボールを全員で回して自己紹介を行った。「日本から来ました、中学校で先生をやってます」。5年生たちの好奇の視線にすこしだけ怯みながら私はそんなことを話した。さて、問いを決める時間になった。「他の人は何を不思議に思うんだろう?」「どんなことを怖いと思う?」という2つの問いが出された。どっちがいいだろう。投票の結果、僅差で「どんなことを怖いと思う?」に決まった。たくさん手が上がる。コミュニティボールが投げられる。

「ゴーストが怖いんだ!」日本人に見える男の子が話し始めた。自分の意見を述べた後に、彼は長いブロンドの髪をした女の子にボールを投げる。よく日焼けした女の子だ。「よくワイマナロベイに行くんだけど、そこから海へ飛び込むのがすごく怖い。すごく怖いんだけど、足が震えるけど、どうしても飛び込みたくなっちゃう」。ボールは、これまた日本人に見える、大人しそ

¹⁹ Ibid., p.5.

うな女の子のほうへ。「夜の暗闇がとっても怖い。特にクローゼットの中とか。寝てるときにトイレに行きたくなって、暗い階段を下りないといけないって考えるだけで、ベッドからでれなくなっちゃう」……。その女の子が、隣の私にこそっと話しかけてきた。「ねえ、ねえ、あなたは、みんなに話したいと思う怖いものってないの？」こそっと、こう答えた。「あるよ。今でも暗闇が怖いね」。

そんなコミュニティに加わりながら、ジャクソンの言葉を思い出していた。

重要なことに、小文字のテツガクの内容は私たちひとりひとりに固有のものです。それは幾人かの哲学者たちが世界における私たちの「状況性 *situatedness*」と呼ぶ特殊なものの、そしてその特殊性に対する私たちの応答の結果なのです。私たちはまた、小文字のテツガクの活動にどれくらい参加しようとするのかという度合いにおいても異なっています。そして、その活動とは私たちの生についての今まきに行われている哲学的な再考のことです。このことをソクラテスは吟味された生を生きることと述べました²⁰。

小文字のテツガクの内容は、各人によって異なる。「どんなことを怖いと思う？」という問いかけに対する答えは、私たちが世界によって与えられたもの、そしてそれに対する私たちのリアクションによって、バラバラになる。ゴースト、水に飛び込むこと、夜の暗闇。探究の共同体では、そういった各人の生活の状況から生まれた言葉を話す。話すということは、声を出し、身振りを交えて、時に笑いを誘い、時に真剣さを見せながら行う、それ自身が特殊な状況の中で演じられる活動である。そこにもまた無数の障害が潜んでいる。話すことは容易に阻害される。目の前の人があくびをするだけで、あなたの話に「面白くない」という声が出るだけで、周りの誰もが話を聞いていないだけで、あなたはソクラテス的な探究への参加をとりやめてしまうかもしれない。それゆえ、その、それぞれのテツガクに対するケアが必要になる。それが聴くことなのである。聴くことは、各人の生活に根ざした答えを話すための状況を作り出す。担任の先生が聴いてくれていることで、ジャクソン博士があなたの話に「面白い」と反応してくれることで、クラスの友達が自分のほうを眺めてじっと聴いていることで、心を開き、話し始める。

どうやったらうまくテツガクすることができるのか、と哲学者は考えやすい。クリティカルシンキングによってうまく考えることができるのではないかとすれば、論理的な筋道を辿るには一番最短の道はどんな道だろうか。初歩的な論理学を教えるのが一番早いのではないだろうか。確かに、論理的に考える事は重要だ。しかし、本当に大切なのはうまくテツガクすることではない。テツガクを始めることなのだ。そのためには、考える事自体を始めるケアこそが最も重要なものであり、p4c ハワイが主張するセーフティとは、このケアの別の名前のことだったのだ。

²⁰ Ibid., p.5.

それでは向かうべき方向は

小文字のテツガク／大文字の哲学という区別は、本来的に哲学をある特定の内容についてのものとして語るのではなく、内容へと応答する方法として考えることを可能にした。最後にセーフティというケアを前提としたインストラクションについて論じておきたい。問いが出され、コミュニティのメンバーが話し始め、先生がコミュニティに参加し始めた後に、そのコミュニティをよりよくテツガクすることに向かわせるための道具が哲学者の道具箱 The Good Thinker's Toolkit (GTTK) である。

(哲学者の) 道具箱は7つのツールによって作られています。私はそれぞれのツールを描くのに頭文字 WRAITEC を使っています。どのツールも哲学的問いの型を表していて、自分一人でも、あるいは他の人たちと協力していても、最初に始まった地点での思考をより深いレベルの思考へと運ぶことができます。どういう意味ですか What do you mean? 理由は何ですか What are your reasons? 前提は何ですか What assumptions are you making? どんな推論をしていますか What inferences? それは本当ですか Do we know it's true? 例、あるいは反例を出すことができますか Can you give examples or counter-examples? こういった問いはどんな状況でも、どんな内容であっても提示することができます²¹。

GTTK を使うことで対話を、意味、理由、前提、推論、真理、例／反例を問いかける方向へと向かわせることができる。WRAITEC によって表現される、7つの質問をあらかじめカードにしておき、輪になって対話を行う中で提示することで対話をよりよいテツガクのほうへ導いていくのである。探究の共同体が問いに対して答えようとするとき、答えの可能性は何にも縛られていない。どんな答えも、許される。しかし、だからといって何のインストラクションもしなくてもいいということにはならないだろう。ひとつは、すでに論じたセーフティが守られることを指導する必要がある。GTTK がもうひとつのインストラクションである。それは、内容へと反応する思考の方法を教えるというものだ。このツールを使うことで、どうやって対話を進めればいいのかという質問に答えることができる。

ワイキキ小学校での「どんなことを怖いと思う?」という問いで行われたブレーンヴァニラに戻ろう。小学5年生たちは、とても活発に、怖いと思うものについて話し続けた。ゴースト、水に飛び込むこと、夜の暗闇……。それからも色んな例の話が出続けた。森の中に潜む毒蛇、校舎の三階から飛び降りること、両親や兄弟、ピストル……。そんな中で、ふと疑問に思い始める。このまま例の話だけをして終わるのだろうか。そのとき、長い間小学5年生の話に聴き入っていたジャクソン博士が話し始めた。「うんうん、今日はみんなの怖いものを聴けて本当にうれしいよ。実を言うと、私は今でも夜が怖くて、どうしてもトイレに行きたくないから、寝たふりをしているとことがあるんだ」。そうやって、ジャクソンは R と書かれたカードを取り出した。「ところで、

²¹ Ibid., p.6.

みんなが怖いものを怖いと思う理由はなんだろうか。今まで色んな怖いものが出たけれども、誰か理由について話せる人はいるかな？」黒髪の女の子がすぐに手を挙げて話し始めた。「私はクローゼットの暗いのが怖い。いつも誰かに見られている気がして、誰かがそこにいて、見られているような気がするの。だから、怖い」。別の男の子も、それに反応して理由を話し始めた。「蛇が怖い、蛇が怖いのは、……けがをするかもしれないからだよ。だから体が怖がれて言ってるんだ」。そこからしばらく、蛇の話になった。

GTTK はこんな風に機能させることができる。もしかしたら、この対話の次のステップは W を出して、それではそもそも「怖さ」とは何だろうかという方向かもしれない。また、T を出して、怪我をする可能性のあるものは本当にいつも怖いだろうかと尋ねるかもしれない。あるいは、その先には C のカードを出して、怪我をするかもしれないけれど怖くないものの例を出すということになるかもしれない。ここで注意しておかねばならないのは、GTTK は、ありうる方向へと導くことであって、それ以外には可能性のない一つの方向へと導くことではないということだ。論理という名の別の強制の方へと向かわせるのではなく、あくまでも GTTK が行うのはうまくテツガクする可能性を広げるということなのだ。

おわりに

哲学を教えるとするならば、どんなことをするだろうか。本稿で p4c ハワイに依拠しつつ答えたかったのは、その問いであった。私の答えは、学校には思考の場がないという批判をしつつ、先生たちとの協働の場をつくること。そして、すべての人が安心して、セーフを感じながら話すコミュニティをつくること。それらすべての前提のもとで、GTTK を用いて、小文字のテツガクへの方向へ子どもたちを導くことであった。私は p4c が哲学を教えることのすべてだとは思わない。あるいは、哲学のすべてだとは思わない。しかし、哲学が考えることに関わるとしたら、そして教室という場所で考えることに関わるとしたら、哲学がこのようなクラス全員に開かれたものになることがありうる。なぜなら、教室では全員の参加が、どこかでは必要になるのだから。

日本で p4c を行うときに、いかにして協力体制を築くのかという課題は依然として残る。また、本稿が単なる記述に過ぎないという問題も残されている。p4c という教育を正しく評価するためにはどうすればいいのか。そこにはまだ、教育評価についての大きな問題が残されている。まだまだ課題が残されていることを確認し、本稿を閉じたい。

(ながかわまさみち 臨床哲学・博士後期課程／早稲田摂陵中学校講師)

Thinking Safely with Others in the Classroom: From the Practice of p4c Hawai'i

Masamichi NAKAGAWA

Philosophy for children (P4C) was started by Matthew Lipman. He thought that academic philosophy was not suited for students at the elementally level. Then he had an idea to write philosophical texts specifically for the elementary students. Teachers and students would read those texts in the classroom and inquire about the questions that P4C texts indicate. At the beginning this style seemed to work well, but gradually faults were revealed. Teachers and students could pose questions; however they could not keep an inquiry moving. In this paper, I describe one possible solution from the practice of p4c Hawai'i.

To build up a community of inquiry in the classroom, it is really important to convert the classroom into an intellectually safe place where all participants can state any view so long as they are all honored. p4c Hawai'i discovered that in order to develop safety in the classroom systematic support was needed. To provide this support, a p4c facilitator goes into the classroom and works closely with the teacher, resulting in “the care” for students. Once the system is established the p4c facilitator and the teacher learn from each other and work together to build intellectual safety in the class so students feel free to express themselves.

In addition to that, we can help students to think effectively by teaching them the Good Thinker's Toolkit (GTTK), which is a set of good thinking practices developed and taught by p4c Hawai'i. This toolkit lights the way to an answer, assisting the community in keeping an inquiry moving.

When philosophers and teachers help each other, students feel intellectually safe, speak their own opinions, and learn how to apply the GTTK to practice good thinking, then the community of inquiry will be able to keep moving through difficult questions.

「キーワード」

子どものための哲学、子どもの哲学、哲学教育、P4C、批判的思考